

98年夏の大会2回戦 豊田大谷VS宇部商



史上唯一のサヨナラボーク宣言
審判は冷徹なルールの番人なのか?

林清一氏に聞く審判哲学
当時の主審

青春のすべてを甲子園という夢の舞台にかけた球児たち。勝負である以上、どんなプレーにも判定が伴う。大舞台だからこそ、ではなく甲子園に縁のない高校同士の練習試合も、日本中が注目する場面でも、普通のジャッジがあつてこそ高校野球は成り立つ。1998年夏の甲子園大会2回戦。豊田大谷と宇部商は延長十五回、史上初のサヨナラボークによる豊田大谷の勝利という幕切れとなった。主審を務めた林清一氏(59)に試合を振り返りつつ、高校野球の審判哲学を語っていただいた。

Scoreboard for the game between Toyotomi Daigo and Ube Shoko. The score is 0-2 in the bottom of the 15th inning.

予断持たない
100年の歴史で今のところ唯一のジャッジは、異様な雰囲気の中、究極の当然を求めた結果の産物でもあった。

想定外の動き
「審判として一番いけないのはヒックリすること。そうならないように、あらゆることを想定するのですが、あの時、ボークだけは考えてもなかった」と振り返ってきたことだった。

間違いない
もし藤田が足を外していれば、ボークではない。「だんだん不安になりました。ミスをやっちゃった、審判人生、終わリだな」と思った。もちろん現場やテレビなどを見た同僚、関係者から「間違いないボークだった」の確信が入った。

隠れたやりとり
試合を2時間以内で終わらせるため、ひっきりなしに選手を急がせ、機械的に判定を下すのが審判員ではない。

清原を「喝した名審判員もいた!!」
林氏が審判員を務める際に心にかけていたのは「ゲイ」。「あごひもつけて来い!」とやったそう。

ウイングボール渡そうとした投手に「持っておきなさい。そして来年、また甲子園に来なさい」

合が控えており、「あの時点で超満員でした」と振り返った。五回終了時、水を飲んだ。試合は延長へ突入。水分、差し入れを期待したんですけど、来なくてねえ」と笑うが、その時は笑い事ではなかった。塁審もバテて、打球を追い切れなくなっていた。しかし「早く決着をつけたい」と思ったら、ジャッジが難になる」と、必死の判定を続けた。十五回裏、豊田大谷は無死満塁の絶好機を迎えた。200球を超える球を投げた宇部商のエース・藤田修平はこの局面で、林氏の想定になかった動きをした。

選手の緊張をほぐし、落ち着かせるために、テキパキ裁いて時間を「貯金」

「甲子園は、誰にとっても一世一代」。少しでもいいプレーをさせてやりたい。林氏は「そういう時のために、通常は無駄な時間を省いて、貯金をしておくんです」という。血の通ったルールの番人があればこそ、甲子園で球児は躍動する。(テニススポーツ・西下純)

次回は今月9日
PL学園対東海大山形戦で、20点以上のリードでマウンドに上がったPL学園・清原和博が初球、カーブを投げたことに「真ん中、まっすぐ放りなさい!」と一喝。別の試合では投げ

野球規則(抜粋) 8・05 塁に走者がいるときは、次の場合ボークとなる。(a) 投手板に触れている投手が、打球に関連する動作を起こしながら、打球を中止した場合。

たい... 普通のジャッジに隠された球児たちへの思い

PL学園対東海大山形戦の9回、登板した清原(左)は85年8月14日、甲子園

「今じゃそんままではできませんけど、そうした味がある審判員から学んだことは多いですよ」と懐かしそうに振り返った。

WHOSWHO (はあし・せいし) 1955年5月25日生まれ、東京都調布市出身、59歳。67年西東京リトルリーグの一員として、世界選手権で優勝。早稲、早大、大昭和製紙で活躍後の86年、東本リトルシニア中学硬式野球部を創設。父・和男氏は同じ野球殿堂入り。協会の理事長、林建設株式会社代表取締役社長、調布市体育協会会長などを兼任。日本リトルリーグ創設者の父・和男氏は同じ野球殿堂入り。

毎大会ごとに委嘱されるボランティア
今年のセンバツに委嘱されているボランティアは、33年連続で委嘱されている。

ター
フィーチャーフォン
14日

デキ男